オトカ前旗訪問

黄河の森緑化ネットワーク
事務局長　矢野正行

平成28年3月18日から21日まで、春先の内蒙古オトカ前旗を訪れた。例年であれば、まだまだ寒く気温もマイナス 10℃にもなり、凍てつくような季節にも関わらず、我々の訪問した3日間は春本番のような天候になり、外での行動に全く支障が出なかった。おかげで平成 27 年(昨年)に植え付けた沙柳と楊柴の生育状況を十分に見ることができた。

平成27年に植えた沙柳

平成27年に植えた楊柴

苗木植付作業

オトカ前旗城川鎮では昨年6月、台風並みの風雨が吹き荒れ、まだ若い植樹して2~3カ月の苗が被害を受けたということであるが、それ以後の降雨が多く、また気温が高めであったため、苗木の成長も順調のようであった。

今年の3月末には例年通り植樹を開始するとのことであり、近隣の住民総出で、砂漠化した土地に沙障を設置し、沙柳と楊柴の苗木を植え付ける予定であると説明を受けた。近隣住民

にはこの仕事が大変有難く、現金収入を得る数少ない機会となっているようである。このため住民から、まだまだ砂漠化土地は多くあるので、今後もずっと城川鎮ハリサリ村で植樹緑化をして欲しいとの要望が出ているそうある。

このように植樹をすることは、近隣住民に仕事を与え、経済環境を少しは良くする事が出来るようである。また、数年経てば沙柳、楊柴ともに家畜の飼料として収穫でき、さらなる経済効果が期待できる。残念ながら、まだ収穫できたとの話は聞いていないが、防砂の役目は着実に進んでいるとのことであった。継続して事業を行うことがいかに重要か再認識した次第である。

ただ日本人に比べモンゴルの人はおおらか、悪く言えば大ざっぱな人が多く、データや資料の収集が不足することがあり、十分な指導が必要と感じている。